



大井小学校の誇るべき授業

今から15年前の2010年（平成22年）本校では画期的な授業がスタートしました。

その授業とは、数十人もの大井町の人を教師（外部講師）とした授業で今も行われています。他地域にも外部講師を招いての授業はありますが、これだけ多くの人たちの授業が15年にもわたり実施されている学校は類を見ません。

その授業とは今年度も学習成果が「大井町芸能フェスタ、伝統文化発表会等」で披露された「6年総合学習伝統文化」の授業です。

私はこの授業のことは以前から知っていましたが、昨年度「子どもたちが変わる」とこの授業に関わった先生たちからお聞きし、「どんな授業が行われるのだろう」「子どもたちはどのように変わるのだろう」と大変興味を持ちました。

そこで今年度、複数回にわたりこの授業を参観させていただくと共に、指導して下さっている地域講師の先生方、15年前に校長を中心とする当時の先生方が発案されたとお聞きしたので当時の校長（川口裕二校長）先生に何故この授業をスタートされたのかお聞きしてきました。

川口裕二先生のお話

大井町は室町時代の有形・無形文化の宝庫である。「菱屋」「お茶」「琴」「生け花」「文楽」等、素晴らしいものがあり、その地域文化を守ろうとして活動されている方々がおみえになる、素晴らしい町との印象を持ちました。

しかし、当時の児童たちは大井町のことを知らない、地域に目が向いていない。それどころか大井町に住んでいることにほこりを持っていないのではないかと、と思われる状況でした。

そこで、この方々の力をお借りして子ども達に大井町への愛着感を育てたいとの思いで、体験型の大井の文化に触れる時間「6年総合学習伝統文化」の授業をスタートしました。

驚くべきことは、この活動を始めるや否や子どもたちに「大きな声」「静と動のある態度」等の変化が出始めてきました。

子どもたちの「伝統文化」の授業の様子を出来る限り参観しました。

子ども達の様子はというと「お琴、茶道、大井文楽、太鼓」それぞれの技を身に付けていく中で、出来るようになった子たちが出来ない子に教えたり励まし合ったりと、相手を思いやりながらどんどん仲良くなっていきました。そして場に合った友達同士の関わり方にも変化が現れ、ほほえましい児童の姿に幾度もふれあうことが出来ました。

「なるほど変化している」と実感できると共に、指導して下さっている先生方の熱意にも触れさせて頂きました。

その成果が「大井町芸能フェスタ」での発表として皆さんに示されたとうれしく思っています。

「伝統文化」授業を指導して下さっている先生方にインタビューしました。

1. 6年生総合学習「伝統文化」授業の歩み

- 平成22年(2010) ・6年生の総合学習における伝統文化習得授業「お琴、茶道、花道、大井文楽」の授業スタート
- 平成23年(2011) ・「太鼓」授業スタート。授業5講座となる
- 平成24年(2012) ・「花道」最後の授業となる。翌年から授業4講座となる
- 令和6年(2024) ・現在に至る

2. 活動回数と時間内容

- (1) 指導時間 年16回 1回の指導時間：2時間 計32時間
- (2) 指導者（代表）

- ① お琴 古山雅楽静先生
他臨時講師として数名（古山先生から指導を受けた人たち）
- ② お茶道 上野たき子先生 他2名（常時）
- ③ 大井文楽 交告 満 先生 15～16名
- ④ 和太鼓 永治 彰康先生 7～8名。

3. 先生方の児童への願い

伝えたいこと 子ども達と関わって思うこと

① お琴

- この一年間で「お琴」で曲を演奏することが出来るようにしたい。



- 参加してくれた児童に教え合うことを大切にしながら「お琴」で演奏することが出来るようにしていく中で「仁（じん：思いやり） 義（ぎ：平等） 礼（れい：礼儀） 智（ち：知徳） 信（しん：確信）」を伝えたい。
- みんな一生懸命。挨拶、琴のできなかった子たちに「出来たじゃない」と声をかけるととても嬉しそうな顔する。子どもたちがどんどん変わっていく姿をみえるのがとてもうれしい。みんながどんどん仲良くなっていく。
- 地域や家の前で目を合わすと挨拶をしてくれる。

② 茶道

- ここ（ひしや資料館茶室）で行う茶道を通して、相手と自然を思いやる心を伝え、16回の活動で盆略点前（ぼんりゃくてまえ：抹茶出すまでの仕方）を自分のものになるようにする。
- お茶道にはお客を迎えるためにお茶をたてる亭主とお客という関係があり、亭主はお客を思いやり、お客は亭主を思いやるという「相手を思いやる」心が基本となる。この「相手を思いやる心」の大切さを感じ取らせたい。
- お茶道の活動に多くの子どもたちが入ってきてくれているのがうれしい。みんな素直で一生懸命覚えようとしてくれている。お茶を立てていると心が落ち着く。子どもたちにもお茶をたてることで心を落ち着かせる経験をさせたい。

③ 大井文楽

- 文楽に関わっていくことを通して、まずは子どもたちに大井町（地元）には、こうしたものが引き継がれていることを知らせる。
- 大井文楽「伊達娘恋の緋鹿子（だてむすめこいのひがのこ）火の見櫓の段」を披露できるようにする。
- 子どもたちを文楽に向き合わせることは、人前で何かすること。それが恥ずかしいと思っている子を人前で演ずることが出来るようにしていくこと。自信を持たせることに重点を置いている。
- 「大井文楽」として受け継がれている中にある日本人の心、人情を少しでも知ってもらいたい。そして後世に繋いでいくことが一番大事。後継者を創っていききたい。
- 子どもたちは先生ではなく、地域のおじさんたちとの意識で気楽に関わってくれている。卒業した子どもたち（中学生）も「あっ、先生がおった」と気楽に挨拶してくれている。

④ 和太鼓

- 大井芸能フェスタ、発表会までに全員が大井太鼓を披露できるようにしていく。
- 町で出会っても元気よくあいさつ出来るよう、あいさつから始まり、あいさつで終わる活動にしていく。
- 大井太鼓は大井太鼓振興会として活動しているが歴史が浅い。町とか神社とかのバックボーンがない。続けていく人が少なくなってしまうと、途中で活動出来なくなってしまうのではないかといった思いがある。是非とも太鼓が好きになり続けていって欲しい。歴史を創っていつてくれる人になってほしい。

「子どもが変わる」とは

子ども達は学校・家庭・地域で「認識力」と「非認識力」を身に付けて育って行きます。多くの人が伝統文化の体験学習で「子どもが変わった」と言われますが、私はこの学習で子ども達は「非認識力」を身に付け、それを無意識のうちに活かしているからではないかと考えました。

伝統文化の学習はいずれもほとんどの子が今までに体験したことのない学習で、新しく学ぶ刺激満載の授業であったと思われます。

指導された先生方は、ただ技術（業）を教えるだけではなく、「他人への思いやり」「平等」「礼儀・あいさつ」「知識を得る」「あざむかない・誠実」の心を持って指導されています。この心をも子どもたちは学び、それを生かしていくようになり「子どもが変わった」という評価になっていったと思います。

他に誇ることが出来る本当に素晴らしい授業です。

「コミュニティ・スクール」

大井小学校は、恵那市教育委員会より2018年（平成30年）からコミュニティ・スクールの指定を受けています。

コミュニティ・スクールとは、学校運営に地域の声を積極的に生かし「地域と共にある学校づくり」つまり地域の学校への支援活動から地域学校協働活動のある学校を目指すというものです。

私は、今回「伝統文化」授業の内容を知りこんな思いを強めました。

認識力と非認識力とは？

「認識力」とは通知表の学習の様子で示されるような数値化できるような能力として現れてくるもので、主に授業で付けていきます。「非認識力」は通知表の所見で示されるような数値で測るのが難しい内面的な能力で、日常生活の中で体験した様々な事柄からの学びを生かす能力、（コミュニケーション能力等）と言われています。

大井小学校は、15年前から地域と一体となって協働活動を推進している「コミュニティ・スクール」。これから大井小学校は地域と学校共通のスローガンを掲げ、主に子ども達の認識力を学校の授業で、非認識力を地域の体験学習で付けていく地域学校協働活動のある学校として進化していつて欲しいと。